



GOOD NEWS と きの こ え

War Cry

1 月号
福音版
2023
January
No.2845

二〇二三年 一月一日発行
明治二十八年創刊
福音版・毎月一日発行
広報版・奇数月十五日発行(除く七月)

リサイクル

— 関係性を新たに —

ステイブ・モーリス

新年おめでとうございませす。この新しい年に皆様が愛する方々に囲まれ、またご自分についての健やかな思いをもって、幸せにお過ごしになるように、と祈っています。

私は最近日本に住み始め

ましたが、日本の人々のいろいろな行動を見て、感心しています。特に環境問題に敏感で、リサイクルが日常生活の一部になっているのはすばらしいと思います。自分のいる所で、自分の健康と周囲の人々の健康を維持するために役

に立つことを実践できる、皆さんがそう考えているのです。

このような持続可能な生活への志向は、人間の在り方の一部として世界の初めから組み込まれていたと言ったら、多くの人が驚くかもしれません。環境に優しいボトルや袋を使うというのは、新しい考え方ではなく、人類のもともとの在り方につながっているのです。

神が最初の男と女を創造された時、二人に命じられたのは明快なことでした。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」(創世記2章16、17節)

私たちはもともと、神の御前で永遠に生きるように造られました。最初の人類である二人が、神の命令に従っていたなら、永遠に生きる機会があったのです。しかし、神のようになりたいたいという傲慢な思いが強く(これは私たちにとても大きな挑戦です)、禁じられている木から食べたため、肉体的に死ぬということが始まったのです。

この瞬間から後、人間と神の関係は、最初に神が考えておられたものとは異なってしまうました。しかし、この極めて重要な関係は再生可能である、というのが良き知らせ、福音なのです! 神の独り子イエスが、預言されていたとおり、赤ん坊として生まれ、人の罪

を赦すために身代わりとなつて十字架に架かってくださいました。それによって、人は神との正しく、健全な関係へと、戻ることができるようになったのです。

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであつて、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。」(コリントの信徒への手紙二 5章17、18節)

世界の創造主なる神は、私たちが本来もっていた、神との個人的な関係をリサイクル(再生)し、和解するために、イエス・キリストを送ってくださったのです。キリストを信じ、神のもとに帰ろうと決意する時、神との正しい関係が与えられ、それを通して、他者との人間関係も再生されます。そして、自分自身についても健やかな認識をもって生きることができるようになるのです。

一人の宗教指導者(律法)

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい。」(ルカによる福音書10章27節)

神は私たちが条件なしで愛してくださいます。この愛を受け取る時、他の人々を愛する、愛の賜物を、神は私たちに与えてくださいます。それは、私たちの周囲にいる人々にとつても大切な感化となり、私たちが他の人々を愛する愛によって、その人々の生活が再生し、神との和解の生活へと導かれるのです。

この新しい年の初め、自分が努力する目標を立てるだけでなく、魂の救いをなしてください。深く追いついてください。そうするならば、永遠の命という賜物が与えられ、自分自身についての健やかな認識、周囲の人々と和解する機会もまた与えられるでしょう。

神の祝福が皆様と、周囲におられる人々の上に、豊かにありますように。
(救世軍士官(伝道者))



神様の粋なご計画



2022年7月10日、横浜小隊での兵士入隊式



浅野 友梨香 さん (救世軍横浜小隊所属)

神様との出会い

私は二〇二二年七月十日に、横浜小隊で兵士入隊(救世軍の正式な信徒(兵士)となること)をしました。母方がクリスチャンの家系なので、祖父母と一緒にいる時の食前のお祈りや、賛美歌を歌うことは物心ついた時から自然なものでした。

年子で双子の弟が生まれたため、幼少期は祖父母と過ごすことも多く、特に祖母とは大親友のように仲良しでした。信仰心の強かった、愛する祖母の考え方や生き方の印象が強く、自分もキリスト教の近くに身をおきたいと無意識のうちに思うようになり、祖母の願いもあってプロテストメントの中高一貫校に進学を決めました。中学校入学以来、礼拝、お祈り、賛美、そして聖書の学びの中で過ごして

思いがけない神様の「ご計画」

二〇〇四年に祖母が亡くなった頃、祖父に新潟小隊に連れて行かれたのが救世軍との出会いでした。その後、横浜でも母に連れられて近くの教会の日曜学校に通った時期もありました。祖母が亡くなった以来、気づけば心の中にはいつも神様がいてくださいました。高校生になると、近隣の学校のアメリカ人クリスチャン教師たちによる文化交流兼礼拝に毎週通うようになり、その先生の一人がご自身の母校を勧めてくださいました影響で、プロテストメントの大学に進学しました。この頃から、自分もきつといつかはクリスチャンになるだろう、とぼんやり考えるようになりました。

そんな私は思いがけないところで救世軍との関わりを急激に深めることになりました。二〇一七年夏、アメリカでの交換留学から帰国した最初の日曜日に、当時祖父と母が通っていた横浜小隊へついでに行きました。



幼少期に祖母と

ちょうどその日、当時来日していた「レボリューション・ハワイ」という、アメリカの救世軍の青年による伝道グループのメンバーが横浜小隊を訪ねており、初めて訪れた横浜小隊で突然通訳を頼まれるという予期せぬ事態が起きました。帰国直後で日本語すら怪しい中、状況理解が追いつかぬままお引き受けする流れになってしまいました。しかも、キリスト教用語が頻出するメンバーの証言だったので、当時の私は面食らってしまいました。それでもやり遂げなければという使命感で何とか足に困惑している私を優しく見守り助けてくださった横浜小隊の皆様の温かさは

救世軍を通してのお恵み

夏休み後、留学先の大学への編入を決めた私に、ご

今でも忘れられません。

その数日後、当時の軍国司令官メイナー大佐から直接ご連絡をいただき、夏休みの間救世軍の本営(本部)で働くという貴重な機会をいただきました。イエス様は取るに足りない私を用いてくださるのだと実感し感謝でした。救世軍の各方面で活躍される士官(伝道者)の皆様の貴重なお話を伺い、一緒に働かせていただけたことは、私の生涯における大きな財産となっています。

出身が近くであったメイナー大佐が大学から近い小



レボリューション・ハワイのメンバーと(前列右から2人目)



(上)2017年9月、オハイオ州の小隊で
(下)2021年秋、晩年の祖父と

隊を紹介してください、アメリカでも聖別会に出席することができました。規模が大きめの小隊でしたが、小隊長ご夫妻をはじめ面倒見の良い方が多く、まるで親戚の集まりに参加しているかのようなアットホームさに大変助けられました。特に自分の子どものように面倒を見てくださり、家族行事には毎回誘ってくださった方の存在は心強いものでした。ご夫婦と子どもたちが温かく迎え入れてくださり、毎週みんなで救世軍に行くことがとても楽しみでした。彼らは今でも私の大切な第二の家族です。

二〇一九年大学卒業後、就職先への引越しの手伝いに来てくれた母と交代で運転すること約三千六百キロ、アメリカを横断して最終目的地に到着した最初の日曜日に、ホテルから近い小隊を訪ねました。礼拝後、多くの方が親切に声をかけてくださいました。まだ家も決まっておらず、車に荷物を積んで移動している状況を伝えると、危ないから、と小隊長に倉庫の使用許可をとってくださった方、来週から旅行に行くのでハウスITTERをしながら家を探したらどう？ と初対面の私にオファーしてくださいる方など、見知らぬ土地で不安だらけの私を温かく迎えてくださいました。たった数時間に起こった奇跡のような出来事を通してイエス様のご臨在を感じました。神様は、見知らぬ土地に娘を残していく母の祈りにすぐに応えてくださったのです。その後その小隊で多くの士官や信徒の方々にたくさんお世話になりました。大学四年生の夏に帰国して以来、救世軍での交わり

祖父の最期に見た伝道の姿

を通してアメリカでも神様の豊かなお恵みに守られました。そして、日米の信徒の方々の隣人愛に触れ、私

もクリスチャンになるなら救世軍がいいな、と思うようになりました。

二〇二〇年、コロナの影響もあり一時帰国した間は、アルツハイマーが進行していた祖父の施設を訪ねたり、一緒に病院へ付き添ったりする時間が与えられました。

祖父は、常に謙虚で感謝の気持ちも忘れず、どんな人にも敬意と思いやりをもって笑顔で接し、困っている人がいたら必ず救いの手を伸ばす人でした。また、好奇心旺盛で、いろいろなことに興味をもって挑戦したり、多くの国に旅行したり、何歳になっても人生まだこれから、と常に目標に向かって歩んでいました。音楽が大好きで救世軍の社会鍋でもトランペットやハーモニカで賛美を献げていました。私たちは祖父が大好きで、祖父も私たちをこよなく愛し、行事にはいつも新潟から足を運び、私たちにもいろいろな経験をさせてくれました。

入隊しない理由がない状況

いつかその時が来たら...

と思っていた私が、この

祖父はアルツハイマーという病気に蝕まれる中、最後の最後まで神様の愛に守られて、変わることなく穏やかな笑顔とハーモニカの演奏で周囲を癒してくれました。そんな祖父は昨年五月に神様のもとへ帰りましたが、この二年を通して尊敬する祖父が、お世話になっっている方々にも心から愛されている様子を行く先々で目の当たりにしました。亡くなる一カ月前、祖父の主治医が「自分は無宗教だが、大西さんの信じているキリスト教がどんなものなのか教えてほしい」と母に尋ねてきたことは、私にとって大変衝撃でした。その後も祖父のご友人方から救世軍のイベントや交流に導かれた様子などを伺い、祖父も祖母同様に彼の存在生き方そのもので福音を伝えていたことを改めて確信しました。

タイミングで入隊を決意したのは三つ理由があります。一つ目は、私の家系で最初に救世軍人になった、高祖母(祖父の祖母)が入隊した年に祖父が生まれたことに気づいた母が、祖父が亡くなった年にも家族の誰かが入隊して信仰が引き継がれたらすごいね、と話してくれたことです。二つ目は、私の年齢が祖父のラッキーマンバーと同じだと気づいたことです。祖父は大学の受験番号であった二十六番を生涯何にでも使っていたのです。三つ目は、帰国の度に力強いメッセージで励ましてくださる小隊士官牧師にあたる「ご夫妻と温かい戦友の方々がいる横浜小隊に入隊したいという思いがあったからです。

祖父の召天後、久しぶりに訪れた新潟小隊で聞いたメッセージ中のある言葉がきっかけで、改めていろいろと考えました。その後の墓参りに決意し、クリスチャンとして歩んだ先祖と母、そして小隊士官ご夫妻へ、その場で報告をしました。まあいつかは...となかなか行動に移せないでいた私に、今回神様は、入隊しない理由がない状況をつくり、わかりやすく道を照らしてくださいました。母が救世軍の兵士として入隊した時にメイナール大佐が「神様はあなたの生まれる前、あなたのひいおばあさんが生まれるずっとずっと前から今日このことを計画されていたんですよ」という言葉を母にくださいました。今回の私の入隊とそれに繋がる一連のご計画が、私が生まれるはるか前から神様によって練られていたと思うと、感謝の気持ちでいっぱいです。これまでの人生の中で素晴らしい祝福を与えてくださったイエス様に感謝し、たくさんの人から受けた愛を今度は与える側になれるよう祈りつつ、これから神様のご計画に身を委ねて歩んでいこうと思います。



2022年6月、入隊を決意したとき。墓前にて。

創立者 ウイリアム・ブース 大将 ブライアン・ペドル (万国本営 英国ロンドン) 日本司令官 スティーブン・モーリス (救世軍本営 東京都千代田区)



世界をみつめて

〈日本〉世界の救世軍のリーダーが来日

昨年11月18～20日、世界の救世軍のリーダーであるブライアン・ペドル大将とロザリー・ペドル中将が来日しました。二人は、大阪での連合集会、東京での堀井ローレンさんを迎えての伝道コンサート、連合聖別会(礼拝)を通し、まだイエス・キリストを知らない方々への救いのメッセージ、また、信徒たちへの励ましのメッセージを聖書から語りました。



(連合聖別会〔礼拝〕は救世軍公式 YouTube チャンネルで視聴できます。)

〈ブラジル〉100周年記念集会

ブラジルの救世軍は1922年に働きを開始し、昨年100周年を迎えました。記念の集会在11月初旬におこなわれ、男性、女性、信徒リーダーのための集会在それぞれ開催されました。多くの人々が集い、これまでの活動を導いてくださった神に感謝を献げる礼拝の時をもちました。



〈カナダ〉サンタクロースパレードへの参加

サンタクロースパレードは、カナダのトロントで1905年からおこなわれている、クリスマスシーズンの始まりを告げるパレードです。昨年11月20日のこのパレードに、救世軍も参加しました。カナダの救世軍スタッフ・バンド(プラスバンド)が演奏し、地元の救世軍の信徒やボランティアもタンバリンをたたいてパレードに加わりまし



た。地域子どもたちや多くの人々と共に喜びの時をもちました。

〈オーストラリア〉洪水被災地への支援

昨年11月、オーストラリアのニューサウスウェールズ州での豪雨は洪水を引き起こし、多くの家屋や畑が泥水につかりました。救世軍では近隣の小队(教会にあたる)と緊急支援チームが、ユーゴラの町で、被災した人々へ食事や温かい飲み物を提供し、災害にショックを受けている人々の話に耳を傾けました。水害後の清掃や、今後の復興のためにも、地域の人々と協力して救世軍は活動していきます。



救世軍とは? What is The Salvation Army? 心は神に 手は人に Heart to God, Hand to Man

救世軍は、英国ロンドンに国際本部を置く、世界133の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウイリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で、家のない人々、アルコールの悪影響下にある人々、搾取される女性や子どもたちに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本では1895(明治28)年に英国から士官(伝道者)たちが来日して、救世軍の働きが始まりました。日本人最初の救世軍士官となったのは山室軍平で、平易な言葉で聖書のメッセージを伝えるとともに、廃娼運動や結核療養所の設立をし、日本の医療、社会福祉の分野における先駆者の一人にも数えられています。ブースや山室の精神は現代にも受け継がれ、各地の救世軍で、キリストの愛と救いを伝え、困難の中にある人々に寄り添い、奉仕する働きが続けられています。

オンライン 救世軍初野戦

(新年最初の伝道集会)

2023年1月2日(月・祝) 午後2時

野戦とは、路傍伝道のことです。救世軍では毎年、新年2日に「初野戦」をおこない、聖書のメッセージをお伝えしています。

今年は昨年同様、YouTube配信でおこないます。どうぞ視聴ください。



https://bit.ly/SAArmyTube

救世軍公報 ときのこえ
発行日 福音版/毎月1日、広報版/奇数月15日(除く7月)
定価 福音版/1部40円、広報版/1部100円(税込)
クリスマス特集号(12月1日号)/1部100円
振替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 スティーブン・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 https://www.salvationarmy.or.jp
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 ピーアンドエス



聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのこえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。